

「幼児の発達」と「認知症」を学ぶ

京都市市町村保健師協議会一日研修会



平成 28 年度京都市市町村保健師協議会一日研修会が 9 月 1 日、本会で開かれ市町村保健師 61 人、在宅保健師 10 人が参加した。

府市町村保健師協議会の井上祐子会長が「国立がん研究センターから受動喫煙による肺がん罹患のリスクについて、受動喫煙の機会がない場合の 1・3 倍になるとの発表がありました。今後、東京五輪の開催に向けて一層の対策強化が各方面で急がれると思われまます」とした上で「協議会では昨年度、たばこ対策のアンケート調査などに取り組みましたが今後ともこの追い風に乗れるようにしたい。本日の講演は、保健師にとってタイムリーで不可欠な研修内容だと思います」と挨拶した。続いて京都府健康福祉部の東中真美総括保健師長らが来賓挨拶した。

この後、午前の研修会では京都府立大学公共政策学部福祉社会学科の服部敬子准教授が「乳幼児の発達のとらえ方と育児上の留意点：3 歳～就学前ころ」と題して講演。服部准教授は「すべての子どもには共通した発達のすじみちがあり、2～3 歳は自我の充実期、4 歳ごろは自制心の形成、5 歳なかばは自己形成が発達の特徴とされています。その



服部氏

発達の途中でつまづきなどが現れてきますが、子どもがとった行動の奥にある願いや思いをきちんと理解し受け止めていただきたい」と指摘。3 人のお母さんでもある服部准教授は「理想は頭の中に置きながらも、実際の育児ではきちんと子どもに向かい合える良い対応は 2 割ぐらい。後は子供を信頼して子育てすればいいのでは」と、ユーモアもまじえながら分かりやすく説明した。

午後からは「生活習慣病予防が認知症を予防する！ ～血管を守るために伝えられること～」と題し、国立循環器病研究センター再生医療部の齊藤聡研究員が講演した。齊藤氏はまず「高血圧、糖尿病、脂質異常症など血管リスク因子を伴う生活習慣病が認知症の発症を促進すると言われています。血管性認知症はもちろんアルツハイマー型認知症も「血管病」としての側面があり、生活習慣病のコントロールが有効とされています」とスライドを使いながら説明。生活習慣病の対策として「毎日血圧を測り運動やバランスの良い食生活が基本。身体を動かすとともに知的好奇心を満たす趣味をもち絶えずこころも動かしていただきたい」と述べた。



齊藤氏